

被虐待児における認知、行動、情緒機能の特徴についての検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒崎, 碧 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001389

順天堂大学 博士(医学)

氏名 黒崎 碧

論文題名 被虐待児における認知、行動、情緒機能の特徴についての検討

(Evaluation of characteristics of cognitive and behavioral functions in abused children treated)

論文内容の要旨

当院を受診した被虐待児において、認知発達検査や心理検査を行なった症例の中に、生来の発達障害と鑑別が難しい、反応性愛着障害が疑われる者がいた。

虐待の原因は、患児自身の発達障害が原因である場合のみならず、養育者に生育歴の問題や養育者自身が心身の疾患を抱えているケースもみられた。

認知機能は偏りの大きい児が多く、乳幼児期は言語社会性の遅れが、学童期には、習得度がより低い傾向にあった。また、これまでの経過から、患児自身の持つ生来の発達障害であるのか、反応性愛着障害による症状であるのか、鑑別が難しい症例も存在した。

虐待により、子どもの発達過程が著しく阻害され、養育者による虐待が続くと、子どもの慢性的なトラウマは、その後遺症として、発達障害に酷似した症状を引き起こすと言われている。虐待による脳のダメージの程度はさまざまな発達障害と比較したときに、はるかに重症であることがわかっている。これらの症状は環境が改善されてもなお継続し、その結果、被虐待児は、身体的な傷害だけでなく、心理的なトラウマが長期化するため、行政や専門機関などと綿密な連携をとり、早期発見・早期介入・家族再統合を目指した長期的な心理社会的支援などの確立が急がれる。